

柔らかなベッドの中。布団にくるまって浅くて温い眠りを貪っていたぼくは、スプリングが僅かに軋む音に両目を開いた。

感じるのは明確な人の気配と、自分以外の誰かの体重によってマットが沈み込む独特の感覚。

過去何度も覚えがあるものだった。

予感ではなくて経験した記憶。そのイヤな記憶を脳裏で反芻したぼくは、息と共に唾を嚥下して、恐る恐る視線を上へと向ける。

月明りをほのかに感じる暗闇の中、薄ぼんやりと浮かび上がる人影があった。

背筋に冷たいものが走る。同時に心臓がキュウっと疎み上がり、臀部の筋肉に緊張が走った。

無駄だと分かっているのに、できる限り息を潜めて深呼吸を繰り返す。自衛のために強張る体を、どうにか解そうと試みた。

覆い被さってくるその上背はぼくよりもわずかに大き

い。努力が功を奏さず、動けないまま横たわるぼくの腕を寝台に押し付ける掌も大きく、そして力強かった。

鼻先でさらりと髪が揺れる。

鼻孔をくすぐるシャンプーの香り。それはぼくも愛用している代物で、この部屋と隣接する専用のバスルームに置かれているものの香りだった。

「——にいさん……」

鼓膜を直接揺さぶる、甘く湿った囁き声。

その淫蕩な響きに僕は戦慄する。

——逃げなくてはいけない。

本能が、そう告げてきた。早く逃げなくては大変なことになる。

それが敵わないって、頭の一部、冷静で客観的な部分では分かっているけど、ぼくはもがいた。抑えつけられた両腕で力いっぱい抵抗し、腰に乗られているせいで動かしにくい足を蹴り上げる。

「どうして嫌がるの、兄さん……」

困惑と悲しみが縋い交ぜになったようなその声。ぼくは弟の、皐月の、そんな声色にとても弱くて——でも、

だからといって容易く許すことのできない一線や矜持がぼくにだってあった。

いやだ、と精一杯の拒絶を示す。声を上げるために大きく息を吸い、唇を開いた。

けれど結局、紡ごうとした言葉は音にはならない。

拒絶の言葉を聞くのが何より嫌いな皐月が、塞ぎ止めるために唇を重ねてきたからだ。

あつという間に侵入を許してしまった。舌がぬるりと絡みつき、口内を這い回る。その感触に、首筋から腕にかけて鳥肌が立った。

息苦しさで生理的な嫌悪感。実の弟と舌を絡めている現状にゾツとした。ぼくの理性と倫理観が警鐘を鳴らす。

どうしたって受け入れない。その舌に歯を立てた。

口の中に錆びた鉄のような味が広がる。ぼくの渾身の反撃に皐月の拘束が緩んだ。その隙を見つけて、ぼくは力いっぱい皐月を突き飛ばす。

ぎしり、と大きくベッドが軋む。暴れたせいで肌蹴っていた布団がベッドの下へと音も立てずに落ちた。

「ごめん、無理だ……」

口の中いっぱい広がる血の味に戦慄しながら、ぼくは尻でベッドヘッドのほうへと後退った。距離を取ったことよって室内の闇に飲まれ、明確な輪郭を持たなくなった皐月を諭す。

「こんなの、絶対におかしいよ……」

「……何が？ どこがおかしいの……？」

呆然としている皐月の声。けれどその言葉にはぼくを弾劾する響きが宿っていた。

「こんなに愛しているのに。どこがおかしいって言うの、兄さん。僕には兄さん以外いないのに。愛してるのに」

暗闇の中で、皐月の表情を見ることなんてできない。

けれど彼から向けられる粘着質な視線は、痛いぐらいに分かった。ただひたすらまっすぐ、彼はぼくだけを見ている。

その視線と『愛している』という呪詛のような言葉が、ぼくの精神を蝕んでいく。

堪えられない、と思った。

このままじゃどうにかなくなってしまいそうで……ぼくは両耳を塞いで、背を丸める。

「……兄さんも僕以外見えなくなればいいのに」
皐月の言葉が頭の内側でこだまする。ぼくを苛む。
やめてくれ。ぼくは叫んだ。
もういい加減、ぼくを解放してくれ。

——そうして何度目か分からない叫び声を上げた瞬間、
本当に目が覚めた。

カーテン越しにも分かるぐらい外はいい天気だ。穏やかな陽射しが差し込み、フローリングの床に長い線を伸ばしている。

ハア、ハア、と。ぼくは何度も息の塊を吐き出す。顔を両手で覆って、吐き気をどうにか抑え込んだ。

季節はもう晩秋だったというのに、パジャマもシーツも大量の寝汗で湿っていた。

「最悪の目覚めだ……」
ここ数日見続けている悪夢に、ぼくは絶望的な気分だ

溜め息を溢す。

すぐさま身を起こし、逃げるようにベッドを抜け出した。丹念に掃除しているフローリングの床はゴミ一つなく無機質で、その上をべたり、べたり、と足音を鳴らして移動する。

目指す先は洗面台だ。静かな部屋にぼくの頼りない足音が響く。

何気なく、カウンタートキッチンに置いた三角形のカレンダーを手にして、日付を確認した。

——なんだかんだで夢待荘に居着いてもう三カ月。

短いようで長くて、でもやっぱり短い、そんな月日が確実に過ぎ去ろうとしていた。